

# 「堀切菖蒲水門見学会」での 効果的な広報活動の工夫について ～地域と連携して集客力UP～

小磯 和美

関東地方整備局 荒川下流河川事務所 地域連携課 (〒115-0042 東京都北区志茂5-41-1)

国土交通省は「アニバーサリープロジェクト」という取り組みを2016年度から推進している。2017年は荒川下流河川事務所の管理施設である堀切菖蒲水門が完成20周年となる節目の年であったため、堀切菖蒲水門見学会を「アニバーサリープロジェクト」として開催した。より多くの方に洪水のリスクや堀切菖蒲水門の役割を知ってもらうためにも、地域のイベントである堀切菖蒲まつり等と連携することで、集客力の向上を図った。

キーワード アニバーサリープロジェクト、広報、イベント、堀切菖蒲水門、見学会

## 1. はじめに

国土交通省では、アニバーサリープロジェクトという取り組みを2016年度から推進している。堤防やダム・放水路、砂防えん堤などの治水施設が果たしている役割は、普段の生活の中で実感・体感することが少なく、また、施設完成後、時間の経過とともにその存在が当たり前になり、地域の水害・土砂災害リスクに対する認知度が低下し、防災意識が薄れてしまいがちである。この取り組みは、地域の方々と治水施設の生い立ちを振り返り、その果たしてきた役割や地域の水害・土砂災害リスクについて再認識していただくため、完成から一定期間経過した施設について、現地見学等の実施を推進しているものであり、発足以降、様々なイベントが開催されている。

アニバーサリープロジェクト全国第一弾となった北陸地方整備局金沢河川国道事務所が行った前川排水機場の稼働開始20周年を記念した講演会では、災害の備えをテーマにした講演や、前川排水機場の歩みのパネル展示を行い、小松市長や地域住民約300人が参加した。このように、地域の水害リスクを再認識してもらうきっかけとなるような取り組みを荒川下流河川事務所でも行うこととした。



図-1 前川排水機場稼働開始20周年記念講演会チラシ(1)

## 2. 荒川下流河川事務所のアニバーサリープロジェクト

2017年は堀切菖蒲水門の完成から20周年の節目となる年であったため、荒川下流河川事務所として初めてのアニバーサリープロジェクトとなる「堀切菖蒲水門見学会(以下、「水門見学会」という。)」を開催することとした。本水門見学会は説明パネルを随時見学できる自由見学と、職員が水門操作室などの説明を行う案内見学(全3回)の2つの内容とした。

水門見学会を開催するにあたり、下記(1)と(2)の懸念があったことから、実施にあたってはこれらを解消する

工夫が必要であると考えた。

### (1)交通アクセス

堀切菖蒲水門は、最寄り駅である堀切菖蒲園駅から徒歩約15分と交通アクセスが悪く、また普段の人通りも少ない。

### (2)堀切菖蒲水門の認知度

荒川下流域には岩淵水門のように地域のシンボルとなっている施設もあるが、堀切菖蒲水門は地元住民でも存在を認知していない方がいるなど、認知度が低い水門である。

これらの懸念事項を解消するため、人を集めることと見学会の内容の充実の2点を軸として、工夫を行いました。

## 3. 工夫と成果

### (1) 開催日の設定



図-2 会場位置図

開催日は、より多くの方に参加していただける休日、かつ堀切菖蒲水門が20周年を迎える6月から選択することとした。6月は葛飾菖蒲まつり(以下、「菖蒲まつり」という。)というイベントの開催が予定されており、その期間と重なる2017年6月3日(土)を開催日とした。菖蒲まつりは菖蒲の見頃に併せて行われており、毎年多くの地域住民や観光客で賑い、過去には8万人以上の来場者があったイベントである。そのイベント会場となる堀切菖蒲園は堀切菖蒲水門から近距離にあることから、菖蒲まつりの来場者を水門見学会に誘導できるのではないかと考えた。

また、菖蒲まつりに併せて、日本橋・吾妻橋への運行

や堀切を周遊運行するクルージングが行われており、その乗船場所である堀切緊急用船着場から堀切菖蒲園へ向かう道のりの間に堀切菖蒲水門があるため、クルージング客についても水門見学会へ誘導できるのではないかと考えた。(図-2参照)

つまり、菖蒲まつりの来場者とクルージング客の双方を誘導することにより水門見学会への参加者増につなげられるよう、この日に開催日を設定した。

### (2) 地域と連携した周知活動

通常、イベントを開催する場合は事前に荒川下流河川事務所ホームページやTwitter等のインターネットや、駅や公共施設のラックにチラシを設置して周知活動を行っている。今回のイベントでは葛飾区協力のもと、区の観光ホームページや区報(図-3参照)にイベント情報を掲載してもらうことができた。区報への掲載料は無料で、かつ葛飾区内の約23万世帯へ配布されるため、予算をかせげずにより広く周知活動を行うことができた。



図-3 葛飾区報抜粋

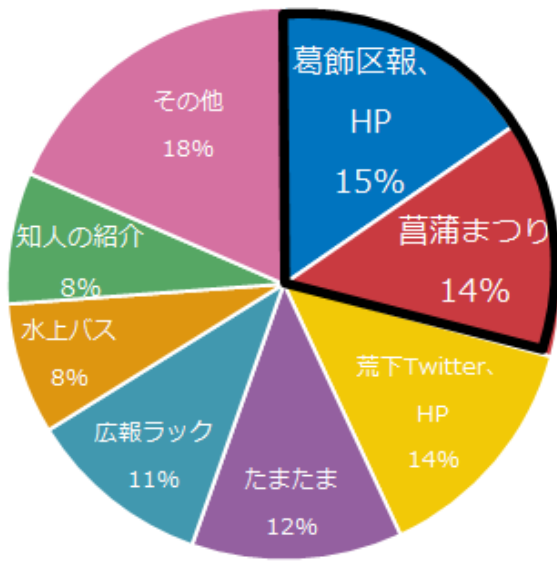
また、菖蒲まつりの会場前で水門見学会のチラシを配布することにより、菖蒲まつりの来場者を水門見学会に誘導することができた。(写真-1参照)



写真-1 チラシ配布の様子

これらの周知活動をきっかけに水門見学会に参加された人は全体の3割ほどであり、(1)と(2)の工夫の結果、

地域と連携した周知活動を行うことができ、集客力の向上を図ることができた。(グラフ-1参照)



グラフ-1 水門見学会を知ったきっかけ  
(見学会参加者アンケート結果より)

### (3) “地域インフラ” サポートプラン関東2017と連携した案内

建設産業の新たな担い手の確保や若手技術者の定着、建設産業全体の生産性向上を図る取り組みを支援する“地域インフラ”サポートプラン関東2017(以下、サポートプラン)では、事務所と受注者が連携して広報活動を行うことが盛り込まれている。このプランをもとに堀切菖蒲水門の耐震工事受注者と連携し、実際に工事に携わった作業員からの説明を織り交ぜることで見学会の内容充実を図った。

見学会参加者からは、「耐震工事の大変さ・必要性が理解できた」という感想をいただいた。

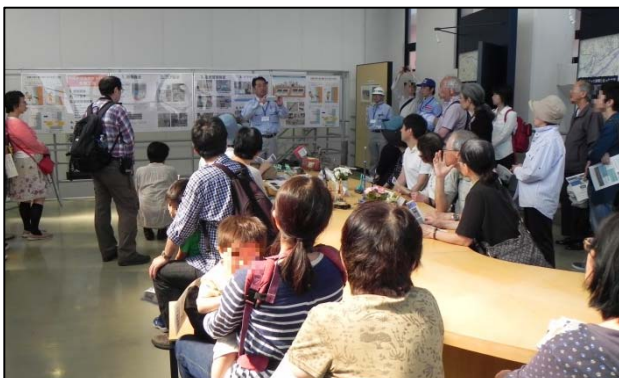


写真-2 現場代理人の説明を聞く様子

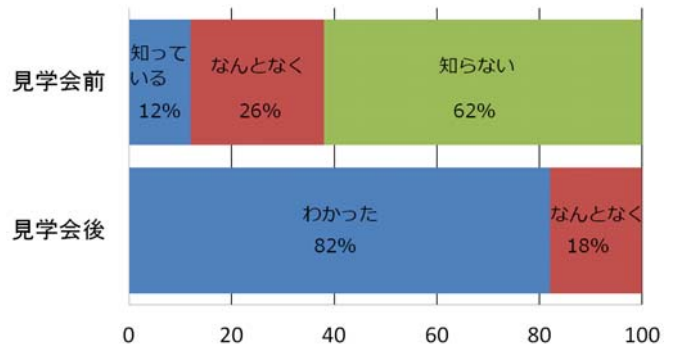
### (4) 施設管理課と連携した案内

以前から「動く水門を見てみたい」といった問合せを受けており、水門の閉まる様子を見学していただくため、施設管理課の協力のもと、2つある門の内、1つを開閉することとした。通常の水門の開閉速度は30cm/分で約30分かかるが、比較的速い自重降下式を採用し100cm/分で約10分で門を閉めることで門の動きがわかりやく伝わるよう工夫した。



写真-3 水門を閉めるボタンを説明する様子

(3)と(4)の工夫の結果、サポートプランや施設管理課と連携して、参加者の治水事業への理解をより深めることができた。見学会後に行ったアンケート調査によると、堀切菖蒲水門の役割を理解している人は見学会前では12%であったが、見学会後は82%に増加している。(グラフ-2参照)



グラフ-2 堀切菖蒲水門の役割について  
(見学会参加者アンケート結果より)

この結果より、アンバーサリープロジェクトの目的である「治水施設の生い立ちを振り返り、その果たしてきた役割や地域の水害・土砂災害リスクについての再認識」



が果たされたものと考えられる。

#### (5) 成果のまとめ

(1)～(4)のように各所と連携することで不安要素を解消することができた。

交通アクセスの悪さや認知度の低さが懸念されていたが、自治体や地元のイベントと連携することで周知活動の機会を増やすことができ、見学会はすべての回で満員となり、自由見学を含めると来場者数は約560人となった。

### 4. 反省点

今回の見学会を通して2点の反省点があった。

#### (1) 団体客への対応

大人数の団体客が一度に集中して来場してしまい、一時会場が混雑してしまった。(写真-4参照)来場者が少人数の時間帯は、自由見学者に対しても職員が直接案内することができたが、クルージング終わりの乗客等が固まって自由見学会場に集まってしまったため、来場者の誘導がスムーズに行えない場面があった。

これを受けて、職員が直接誘導しなくても順路がわかる表示を設置し、人の流れを作る対策が必要であったと感じた。また、人数があふれてしまう場合は、複数のグループに分けて、水門の外観から見学するグループや、説明パネルから見学するグループ等、見学する順番や場所を分散させることで人が一箇所に固まらないようにする工夫が必要であったと感じた。



写真-4 混雑状況

#### (2) 非効率な受付方法

今回の見学会では、各回それぞれで時間を分けて受付(写真-5参照)してしまったため、定員漏れした人が次の受付開始時刻に再度並び直さないといけなくなってしまった。また、受付開始時刻よりも早く定員を上回る人数の待機列ができてしまい、受付開始前に募集を終了する回もあり、受付方法の見直しが必要だと感じた。

対策として、各回の受付時間を分けず随時まとめて行うことで、並び直しせずに効率的に受け付けることができると考えた。この方法は2017年8月に行った岩淵水門見学会で採用し、受付方法の効率化を図ることができた。



写真-5 受付の様子

### 5. 今後の展開

他の水門についても見学会を希望する声が聞かれたため、堀切菖蒲水門に引き続き岩淵水門見学会を開催した。こちらの水門見学会でも水門に対する関心度の高さを伺うことができ、水門は重要な広報資源なのだと実感した。今後もアニバーサリープロジェクトに限らず、治水施設の役割や地域の災害リスクの再認識を目的としたイベントの実施を行っていくことで国民の国土交通行政への理解につなげていくことを目指していきたい。

出典

1) 国土交通省ホームページ

([http://www.hrr.mlit.go.jp/kanazawa/mb5\\_kouhou/press/h28/p0608\\_1.pdf](http://www.hrr.mlit.go.jp/kanazawa/mb5_kouhou/press/h28/p0608_1.pdf))